

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第104号 2023年（令和5年）7月20日  
編集・発行 神戸市立中央図書館  
〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1  
TEL：(078)371-3351 FAX：(078)371-5046



宇治川上流（北側）から山手幹線方向を望む



宇治川市場商店街（JR高架前から北を望む）

## 神戸の暗渠 あんきょ

JR元町駅東側を南北に貫いている道路を「鯉川筋」といいますが、地面の下にはその名のとおり「鯉川」という川が流れています。もともと鯉川は、中央区の堂徳山から神戸港に流れていた川ですが、明治七年に居留地の外国人から、汚染がひどいので川を覆ってほしいという要望があり、地面の下に通すようになりました。このような暗渠Ⅱ地下河川は市内にいくつもあり、『こうべの川』（神戸市建設局防災部）では、それらの川筋を地図で見ることができません。たとえば、中央図書館の東側に流れる宇治川は、山手幹線と交わるあたりから地下に潜り、地上は宇治川市場商店街となっています。

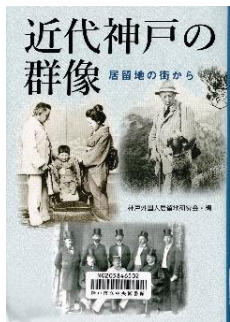
一方、かつて今のフラワーロードを流れていた生田川は、明治四年に現在の場所に付け替えられ、昭和初期に現・新神戸駅の所から下流は暗渠になりました。しかし、昭和十三年の阪神大水害で流木などが暗渠入口部分をふさぎ、被害が拡大したので、暗渠は解消され今に至ります。神戸市街地の都市化には、山が海に迫る地形に起因する河川整備の歴史が見え隠れします。

参考文献…『歴史と神戸』一四巻五号、『六甲三十年史』ほか

近代神戸の群像 居留地の街から 神戸外国人居留地研究会編（神戸新聞総合出版センター）

創立二五周年を迎えた神戸外国人居留地研究会による論文集。内容は、初期構想図「神戸外国人居留地図」の再検討、六甲山を世界に紹介したH・E・ドント、外国人商人と日本人商人の取引における諍いである「フルード事件」、ラフカディオ・ハーンを神戸で治療したドイツ人医師、神戸におけるユダヤ難民の足跡等、多岐にわたる。

同研究会に所属する市民研究者らによる丹念で綿密な調査により、近代神戸の知られざる一面がまた明らかになった。



第一次大戦と青野原ドイツ軍俘虜收容所の日々と音楽活動 岩井正浩（公人の友社）

第一次世界大戦の敗戦により、中国の青島で俘虜となったドイツ軍の兵士らは、日本各地の收容所に分散收容された。本書は姫路、そして姫路から青野原（現・加西市）に移転した收容所について、新聞記事や写真資料をベースにまとめられている。俘虜が人道的に扱われていた時代、音楽やスポーツ等で地元と交友を深めたこと、彼らの持つ高い技術・技能に着目した日本側の動きも興味深い。

震災後のエスノグラフィ 「阪神大震災を記録しつづける会」のアクシオンリサーチ 高森順子（明石書店）

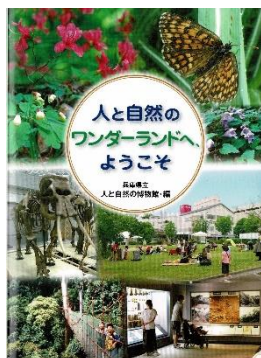
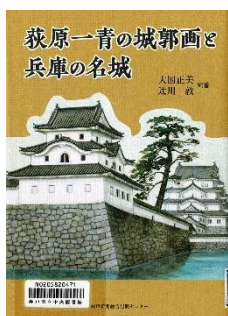
著者は、阪神・淡路大震災の手記を集め出版してきた「記録しつづける会」の事務局長であり、研究対象のコミュニティに入り共に活動をつくりあげていくアクションリサーチの研究者である。本書は、自ら担ってきた同会の活動を記録し、分析、考察することでアクションリサーチのあり方を提案する。担い手として研究者としての著者のひたむきな姿勢が伝わる。

中井久夫 精神科医が遺したことばと作法 増補新版（河出書房新社）

令和四年八月に亡くなった精神科医の中井久夫は、神戸大学名誉教授を務め、阪神・淡路大震災の際にも被災者の心のケアに尽力するなど神戸で多くの活躍をした。また、文筆家として詩の翻訳やエッセイも執筆している。本書は中井本人の談話のほか、精神科医や哲学者、編集者など中井を知る人々による追悼エッセイや思い出話が収められている。患者に寄り添う人柄の魅力と治療への信念が浮かびあがる。

人と自然のワンダーランドへ、ようこそ 兵庫県立人と自然の博物館編（神戸新聞総合出版センター）

「ひととはく」の愛称を持つ「人と自然の博物館」は、昨年開館三〇周年を迎えた。本書はその記念誌で、兵庫県の植物の分布、恐竜化石、アリの研究など自然に関する幅広いテーマが収録されている。四〇年近く苔の研究をする准教授をはじめ計三七名の個性豊かな研究員たちが、独自の語り口調で自身の経験や研究・調査の醍醐味をわかりやすく紹介している。



荻原一青の城郭画と兵庫の名城 大國正美・辻川敦編著（神戸新聞総合出版センター）

荻原一青（一九〇八〜一九七五年）は、尼崎出身の城郭画家である。第一部は、兵庫県の城と一青が描いた城郭画を解説している。尼崎城をはじめ、姫路城や明石城などを取り上げ、他の絵図や城の現状などと比較・検討し、一青の視点を分析している。

第二部は、一青の生涯や作品についての解説や考察である。波乱の生涯や、全国各地の多数の城を実際に訪れ、描き続けた熱意とその功績が、関係者の証言を交えてまとめられている。



**牧野富太郎の植物学** 田中伸幸(NHK出版)

牧野富太郎の植物研究は、日本全国で標本採集を繰り返して、それを内外の文献で同定するものだった。日本産植物に付けた学名の数は国内の研究者の中で最も多い。また、植物図のレベル向上にも貢献した。型破りな生き方が愛された富太郎だが、研究者としての彼の業績を知ること大切である。それが真の意味での牧野富太郎の顕彰になると筆者は述べている。

**ガイドブック 兵庫県立兵庫津ミュージアム** 兵庫県立兵庫津ミュージアム編集・発行

明治初期までの神戸の中心は、兵庫津あたりだった。平清盛による日宋貿易、近世の北前船など兵庫津は時代とともに栄え、近代になると、明治政府により兵庫県庁が置かれた。本書は令和四年十一月に開館した同ミュージアムのガイドブックで、兵庫津のなりたちや歴史を時代ごとに学べる。また、復元された初代兵庫県庁についても詳しい本書を手に、界限に残る当時の名残を訪ねてみたいくなる。

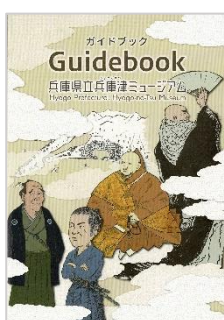
**よみがえる川崎美術館 川崎正蔵が守り伝えた美への招待** (神戸市立博物館、神戸新聞社、毎日新聞社ほか)

神戸川崎財閥の創業者である川崎正蔵は実業家であるとともに美術愛好家であった。収集した美術品は秘蔵せず、布引の山麓にあった自邸に瓦葺二階建、床の間や違い棚などを備えた書院造の美術館を建設した。この日本初となる私立美術館で収蔵品の展示会を開催していたが、正蔵の没後、金融恐慌のあおりを受け、美術品の数々は国内外に散逸した。本書は、正蔵が収集した美術コレクションと、ありし日の美術館の姿を紹介する特別展の図録である。多数のカラー図版と詳細な解説を収録する。

|| その他の新刊 ||

**兵庫の教科書** (JTBパブリッシング)

**神戸紅茶株式会社100年の歩み** 下司善久(「神戸紅茶株式会社」)



神戸 その27  
あんな人こんな人

吉川 幸次郎 よしかわ・こうじろう

明治37年(1904) ~ 昭和55年(1980)

中国文学者として知られる吉川幸次郎は、花隈町(現神戸市中央区)で貿易商を営む家に生まれました。第一神戸中学校(現神戸高校)、第三高等学校を経て京都帝国大学(現京都大学)を卒業し、昭和22年(1947)に京都大学教授に就任しました。元曲※や杜甫の漢詩をはじめとする中国文学の研究に取り組んで多くの著作を残し、昭和44年(1969)には文化功労者に選出されました。



吉川文庫所蔵資料

第一線の研究者となっても故郷神戸との縁は深く、母校である神戸高校の校歌の作詞を手掛けました。歌詞にある「海彼の夢をいざないて」という

一節について吉川は「神戸に生まれたお蔭で早くから海外の異文化に興味をもち得たという僕自身の経験をよみ込みました」と述べています。また、雑誌に寄稿した「故宅」と題する文章の中で、生まれ育った花隈の風景を「外国船の出入が一望のうちにあり、丘陵の下の町町の騒音が、川崎造船所の鉦うちの音をリズムとして、たちのぼった」と振り返っています。

吉川逝去ののち、ご遺族の意向で蔵書の一部が神戸市立中央図書館に寄贈されました。約60年にわたる研究生活の中で渉猟された漢籍を中心とする約24,000冊の貴重な資料は「吉川文庫」として受け継がれています。

※中国、元代に盛行した演劇のこと。

【参考】『吉川幸次郎』桑原武夫ほか編(筑摩書房,1982)、『吉川幸次郎全集決定版』27巻 吉川幸次郎(筑摩書房,1987)、「故宅」『文藝春秋』第48巻第1号(文藝春秋社,1970)、『書燈』207号(神戸市立図書館,1983)

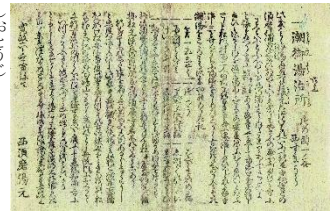
### 須磨の海水浴

明治二十一年（一八八八）に、山陽鉄道（現JR西日本）の兵庫―明石間が開通し、須磨駅が設置されました。当時の旅行案内書『山陽鐵道旅客案内』では、須磨は次のように紹介されています。「此地水清く空気爽やかにして風土すこぶる脚気病者に適し夏時には兵庫神戸あるいは大坂京都辺より転地療養に出掛くる患者少なからず。一ノ谷の海辺および摂津播磨の境界なる境川の両所に海水温泉場あり」。須磨には海水温泉場というものがあつたようです。



『山陽鐵道旅客案内』  
巻之一

ここに当館所蔵の『口上潮御湯治所』という江戸後期の引札があり、西須磨湯元が湯治所の宣伝のために作成した木版一枚刷りの広告で、「潮湯は在原行平が病氣平癒と伝わり各種病に効能あり。須磨は名所旧跡の地。皆様お誘いあわせてご入湯を」という趣旨が書かれています。



『口上 潮御湯治所  
津の国一ノ谷 西すまうら』

寛政6年(1794)とある引札。  
配布はそれ以降と推定される

潮湯治は日本各地で古くから行われていたもので、海水をくみあげて沸かした湯につかること、直接海水につかつて浴すること、海岸で憩うことを指しました。明治時代の医学資料『日本轉地療養誌』は、日本における海水浴の起源は古来の潮湯治にあり、明治十年代頃から西洋医学の影響を受けて潮湯治が海水浴として医療の目的に用いられるようになったとし、須磨を含め全国の療養地を紹介しています。

明治二十二年（一八八九）、須磨の三ノ谷に、鶴崎平三郎医師による結核療養専門病院「須磨浦療養病院」が創設されました。創設期の資料には「須磨の海気は身体組織成分の新陳代謝を旺盛にし食機を亢進せしめ營養を佳良にし体質を改良し体量を増加し皮膚及び神経系を強固ならしむるの効力を有す」と書かれ、海水浴は療養の一つとして捉えられています。

した。

また、病院より海岸に近いところには「須磨保養院」がありました。明治二十八年（二八九五）、俳人の正岡子規がこの保養院に滞在しました。五月、日清戦争から帰国の船上で咯血した子規は、和田岬で下船後、神戸病院に運びこまれました。一時は重篤な状態でしたが回復し、保養院へ移りました。子規の未完小説「月見草」によれば、松林の中に風呂場や球突場、小憩場を備えた建物があり、一棟あるいは一間に、一泊から長期と期間を問わず宿泊可能なものでした。療養中の主人公は、夕方の決まった時刻に海につかりに通う少女にそつと心を寄せます。子規は八月に保養院を出ますが、残された句には往時の風景が描かれています。

涼しさや松の葉、こしの帆掛け船  
人もなし木陰の椅子の散松葉

明治・大正の旅行案内を見ると、保養院のほかに、海月館、松の家、福の家、原田旅館、志賀熊といった旅館が紹介され、須磨は療養に行楽にと幅広く客を迎えるようになっていたことがわかります。

明治四十三年（一九一〇）三月、兵庫電気軌道（山陽電気鉄道の前身）

が営業を開始し、八月には同社によって須磨浦海水浴場が開設され、以後、一帯に海水浴場が増えていきました。昭和十二年（一九三七）の観光案内書には境濱・須磨・天神濱・妙法寺川の海水浴場が確認でき、須磨浦のにぎわいが伺えます。



右上：絵葉書  
「須磨の海岸」  
(昭和13年頃以前)



下：『神戸及須磨舞子明石案内』付図（大正10年）に加筆

現在、須磨を訪れると海水浴場がJR須磨駅より東に広がり、そして一ノ谷より西には須磨浦公園の林が続いています。静かな林はかつての姿を偲ばせ、暑さのやわらいだ夕刻に歩くと、海沿いの風景と潮風が今もなお心身を癒してくれるかのようです。

参考文献・『山陽電気鉄道六十五年史』  
宮崎修二郎『ふるさとの文字』ほか